

ミリタリー・カルチャー研究会著
『日本社会は自衛隊をどうみ
ているか―自衛隊に関する
意識調査報告書』を読んで

徳田 八郎衛 陸自61

この研究会について

海外の戦争社会学・軍事社会学では、「軍事組織それ自体の文化」と定義されてきたミリタリー・カルチャーを、京大・阪大等の社会学研究者で構成される当研究会では、「市民の戦争観・平和観を中核とした、戦争や軍事組織に関連するさまざまな文化の総体」と独自に定義して、活発に調査や報告を行ってきた。1970年代後半には高橋三郎京大教授を中心に「戦友会」の調査研究を行い、最近では吉田純京大教授が代表となつて「戦争体験世代に代りメデアやポピュラー・カルチャーから戦

争や軍事知識をイメージする世代」が台頭する現代日本のミリタリー・カルチャーを社会学・歴史学から解明している。

このメンバーの一人と議論する機会を得た筆者は、「この日本独自の定義は如何なものか」と疑問を呈したが、「戦前・戦中への徹底的な批判と否定から戦後が始まった日本では、独自の定義が必要」と説明を受けた。そして研究会は、正しい世論調査データの蓄積に熱意を見せている。既存の世論調査は、自衛隊の海外派遣、安全保障関連法等の時事的な話題に対応して行われることが多く、市民の戦争観・平和観、それと相關する価値観・社会意識・知識などの総体にわたる客観的・学術的に体系化されたデータが欠けていると説く。

2020年に刊行された『ミリタリー・カルチャー研究―データで読む現代日本の戦争観』（青弓社）では、「戦争責任」「特攻」から「朝ドラと戦争」「プラモデル」を経て「自衛隊への印象と評価」まで意識調査を進めていく。内容は、2015〜2016年に行ったインターネット調査の回答データの分析結果である。

それを追つて翌年に刊行された本書は、「自衛隊への関心と印象」から始まる。2015〜2016年の調査は、元々軍事・安全保障問題に関心が高い層を対象にした調査であった。今回は、全国規模の無作為抽出による郵送調査を性別×6年齢層の12セル、3780名について2021年初頭に行い、52・1%の回収率で1971名から回答を得ている。

本書独特の構成

本書の第1章「自衛隊への関心と印象」での最初の質問は、「自衛隊への関心」を尋ね、「①非常に関心」「②ある程度」「③あまりない」「④まったくない」から選択させるのであるが、それに続く質問が、①と②に対しては「そうだった理由は何ですか。次の10項目から2つを選んでください」と続く。それも「安全保証への関心」「自衛隊の災害救助活動に関心」に続き「自分が（家族・知人が）自衛隊関係者」「基地・駐屯地の近くに住んでいる（いた）」「自衛隊が題材のマンガ・ドラマ・映画・小説」から「自衛隊に批判的な観点から動向に関心」まで実に豊富であ

る。回答を要約すると、安全保障と災害救助活動が断トツで、マンガやドラマは1割に満たない。

続いて陸海空自衛隊各々について5段階で印象の良さ・悪さを問うている。珍しい調査だ。陸に好意的な人がやや多いが、それは海空に「どちらともいえない」がやや多いからでもある。接する機会が少ないからであろうし、正直な回答と言える。

自衛隊への印象が始まる質問も、「平和安全法制」「国際平和協力活動」「在日米軍基地問題」「国家観」と進むと難問化し、「わからない」とする回答も2割に達するが、準備される選択肢は多く、またユニークである。「日本が紛争に巻き込まれた場合、あなたの行動は？」に対する選択肢は、お馴染みの「自衛隊に志願して戦う」から「武力行動には一切非協力」までに加え、日本人らしい「政府の指示通り行動」や「周囲の様子を見て行動」など8項目が準備されている。「外国へ避難」などの非現実的な項目は掲示されていない。

研究会の狙いは、安全保障問題の討議の基礎となる客観的なデータの整備にあり、その解釈や分析は読者に任せている。読者の一人として一

言述べるならば、政府系広報紙(誌)も10紙に上るが、防衛白書以外は殆ど知られていない。さらに「知っている」と答えた人に「それを読んだか」と質問を進めると、防衛年鑑や自衛隊装備年鑑のような専門誌では半数以上が読んでいるが、白書では1割程度しか読んでいない。

「防衛体制や自衛隊についての意見に影響を及ぼした小説・マンガ・映画等を幾つでも挙げよ」と尋ねると、トップは海保を描いた「海猿」だ。「空飛ぶ広報室」「沈黙の艦隊」等の後に続くのは「永遠の0」「火垂るの墓」で過去物である。小説となると、すべて過去物となる。国民の意識が変わった今、広報のあり方も変えねばならない。

青弓社 定価3000円(税別)

